

課題曲の中の課題 2015

～課題曲 演奏の手引き～

櫛田 肤之扶

今年度の全日本吹奏楽コンクールの課題曲に見られる、色々な課題を、書いてみようと思います。

コンクールを一つの目標にしたり、バンドによっては、それ以上に、年間の最大目標にしたり、しています。音楽すること、自分ちの音楽の技量を磨くことは、コンクールで、他のバンドと争って勝つためではありません！！

自らの情操を高め、人間として成長して行くためのものです。ですから、コンクールをそのための一つの目標とするならば、それはそれで良いのです。そのように、純粋に音楽を学習するためでしたら、何かお役に立てたら、と思って書いています。

提出された課題曲に、どんな課題を与えられているのか、どういったことを課題にすれば良いのかを、しっかり捉えて行かなくてはなりません。このコンクールでは、課題を出す側からは、何が課題で・何を課題にするか、と云ったことは、はっきり示して頂けません。参加する側にとっては、とくに初心者バンドにとっては、とっかかりがなくて大変です。

何が課題かを、自分達の方で、見つければ良い、その見つけることも、課題なんですよ、ということでしょうか。それはそれで、やはり勉強の内と、覚悟を決めて、今年もしっかり取り組みましょう。

おおよそ3ヶ月も取り組むわけですから、しっかり取り組めば、多くのことを学習出来るはずです。演奏技術の体得も当然ですし、知識も沢山得ることが出来るはずです。もう一度、音楽する目的をしっかりアタマに入れて、今年もコンクールに臨んで下さい。

なお、この手引きにもとにした研修会、関西吹奏楽指導者協会の主催で、2015年5月17日の午後、東大阪市民会館にて開かれます。勿論、直接に質問・回答の機会があります。ぜひ、ご参加下さい。

I 天空の旅—吹奏楽のための譚詩— / 石原 勇太郎

朝日作曲賞受賞作品として、構成力・音楽の質・内容の把握し易さ、どの方向から見ても、納得出来る優秀作品と云える、いわば、優等生作品です。和声進行を曲の基盤にすえて、がっちり構成された、建築物のような作品に仕上がっています。主題が、コードの構成音<B♭・D・F>→<E♭・G・B♭>→<C・E♭・G>→<F・A・C>…で綴られた旋律で提示されます。この分散和音（コード・トーンのみを使ったフレーズ）による旋律創作のアイデアは、シンプルに見えて、誰も使わなかった新鮮さが興味をそそります。そして次には、これらをコードとして、和声進行を確立させて、その和声進行に乗って、2部構成の第2主題[E]以降の旋律が作られる、といった上手く計算された構成となっています。

主題旋律から作り出される和声進行は、極めてスタンダードで、教科書的で、なんの外連味（ケレンミ）もなく、これは、良い教材にもなります。ただ問題は、それほどまでに、上手く作られているからと云って、それだけで曲として魅力的であるかどうかは別問題です。《天空の旅》と云った大きな幻想的なタイトルから来る、魅力的な想像の世界が、開けて来るかどうかは、演奏のアプローチ次第といえます。

このアプローチのヒントは、作曲家もコメントしているように、詳細にわたり付せられた、楽語（表情・速度・奏法・強弱などすべて）にあります。この細かな楽語を、解いていくことは、良い学習の場にもなり、この曲の演奏表現の大きなポイントとなります。楽曲の全てに、極めて細かく、アーティキュレーションが施されていますから、これは絶対に守られなければなりません。そして、このレガート、スタッカート、マルカートの組み合わせは、ダイナミックスのコントラストとともに、十分に準備されている必要があります。[A]からブッシュターベによって段落された楽節の音色・音量のコントラストに、バンドとしての主張を十分持って下さい。

まずタイトル《天空の旅》ですが、スタジオジブリっぽいものを感じ、何か「果てしない・永遠の……」みたいなイメージを持ってしまうと、裏切られます。僕はもっと現実的・リアルなものを感じました。その辺は、《Pilgrimage（巡礼の旅）》という英訳のタイトルがヒントになりそうです。

<提示部>

[A]の主題は、*risoluto e maestosamente*（堂々と荘重に、迷いなく）と云うわけですから、テンポの設定が揺るぎなく、大きなハーモニー感のある響きで、太い流れが必要になって来ます。

[E]直前の全楽器4分休符は、単なる1拍以上の意味を持たすべきで《間》と呼ばれば良いでしょう。[E]から、主題の逆行形の第2主題に入ります。[F]でクライマックスを迎え、前半部を終わります。グラディエーションを作る16分音符の流れには（強弱記号 *più f* ですが）、大きな抑揚を持たして、平凡なフレーズにならないような設定が大切です。考えさせられるフェルマータ、Hr. の *dim.*。指揮者の感性が、率直に表れて、バンドの生命が問われます。

<中間部>

【G】から、*quietamente e religioso*（敬けんな・献身的な、心静かな）の「祈りの歌・愛の歌」とでも云える主題にはいります。心に迫る旋律ライン、静かな祈りのなかに、心温まる優しさが、溢れています。この部分でも、各フレーズの表情には、内面的な指示をも含めて、細かくコメントされています。その作曲者の意図を、十分に理解して、表情を創っていかなくてはなりません。

A.Sax.1st. に導かれるように、2nd.が主旋律を奏でます。*rall.*して、*e angora*（悲哀に満ちた）Fl. へ。Vib.と St.Bass の *pizz.*がとても良い。コード進行・ベースラインともに良い。

【H】からの A.Sax.、続く T.Sax.の solo は、*con malinconia*（憂鬱に）より、寂しさの中で、ぐらゐの気持ちで、少しオーヴァー気味で訴えるといいでしょう。Trb.のバックイングは、*pregando*（祈るように）です。

祈りの心が高揚して、【I】のクライマックスを迎えます。ブラス・セクションの、4分音符の背景は、高揚する心の内面を捉えて、切迫感を持続します。静まって行く心の動きは、【J】の Euph.、Bsn.、St.B.、そして Vib.、Glock.のアンサンブルです。

【K】への直前の *f* は、*non rit.*（速度は落とさないで）、*morendo*（消え行くように）と云う指示です。これは大変難しいです。が、*rit.*しながら、またはフェルマータして、次の早い部分へ移ると云う楽曲が多い中で、このように流れを持ったままで、知らず知らずに次の部分に移っている、と云う何かすごく格好良さを感じます。

【K】の導入部のフレーズを入れ替えた、印象的なブリッジを経過して、再現部【L】へ入ります。

<再現部>

【L】からの再現部は、スコアを読むことが楽しくなる位、主題のモチーフが次々と色々な形に構成されて現れます。前半での主題を思い起こして、再現部を構築して行く、その楽しさを味わって下さい。

【O】の 1 小節目は、完全に独立させておいて（間を感じさせて）、*assai*（十分に）、*stretto*（緊張感を高めて）、*ma non accel.*（速度を早くしないで）とまた難しい要求ですが、堂々とした威厳を持って幕を閉じようとするわけですね。

大変解り易い 3 部構成ですが、ドラマティックな運び・表現には、大変多くの要求が示されています、細かく部分を分けて、その一つひとつのセンテンスを、しっかり表現に結び付けて行くことが重要です。

II マーチ「春の道を歩こう」／佐藤 邦宏

吹奏楽は、セレナーデ・ディヴェルティメントなどの様式を持つ、室内楽としての管楽器アンサンブルと、軍楽隊（オスマン帝国・トルコ軍楽隊）を出発点とする、野外音楽の2つの流れを見ることが出来ます。その後者は、行進曲という形式となって、発展して来ました。タイケ、アルフォードなど、のヨーロッパの行進曲、そしてスーザが創り上げた、アメリカのマーチが、その代表だと云えます。

吹奏楽は、行進曲が基本だ、とする考え方は、吹奏楽の成り立ちを、この後者の流れの中で捉えた、ということになります。全日本コンクールの課題曲に、行進曲を含めようとしたのも、この考えからだと思えます。

ただ、全日本吹奏楽コンクール（全日本吹奏楽連盟）は、その歴史的に確立された、行進曲の様式・形式から些か離れた（踏襲しているようで、していない）、課題曲行進曲(?)を創り上げました。

歌謡的なポップ感覚の旋律が、行進曲のテンポ・リズムで、演奏される、といった楽曲です。4拍子で書かれて、2拍子のベース・ラインが敷かれ、4拍子・2拍子が入り交じったフレーズの旋律、形式・様式は、一応マーチ・Trio からなる《複合三部形式》の形をとっていますが、細部にわたると種々雑多と云えます。行進曲（音楽）をどのように考えているのでしょうか。やはり、いまだに音楽の「発展途上国」です。

そうは云っても、コンクールはコンクールです。この課題曲行進曲で、しっかり学習して行きましょう。

「春の道を歩こう」というタイトルが良いです。シンプルで、率直で、気持ちが前へ出ています。最近、変に解り難い（本人は凝ったつもり？）タイトルを多く見受けますので、余計にこのような曲のタイトルが気持ち良いのです。

<イントロ>

ベース・ライン、ブラスとサクソセクションの和声進行、高音木管群のスケール、この3つのバランスをとるのが難しいですね。木管群とベース・ラインの相性は良いと思えますので、割って入るブラス・セクションの和声が生きる（しっかりと鳴る）音量バランスが重要になります。

ブラスセクションが、どれだけ豊かな和声を、響かせることが出来るか、最初の課題です。トップ・ノートが短3度上がったとき（3小節目）、フラットにならないこと、5・6小節目でサクソセクションが出過ぎないこと、この辺がポイントと見ます。[A]の直前2小節、Glock.が爽やかなムードを漂わせてほしい。

<第1マーチ>

アウフタクト7度の跳躍をもって、テンション・ノート9thから入る8小節[A]の旋律は、爽やかさを感じさせます。スタッカートとレガートの組み合わせは、気持ちの入って行くところです。スタッカートは、「音を離して」という意味で、決して「音を切る」ではないのですよ。Hr.の長い音のバックギングは、息切れしないように、8拍でブレスしたりしないようにしましょう。

[B]からは、カウンター・メロディを前面に出して、広がり求めます。シンコペーション・ノ

ートには、しっかりしたアクセントを付けて、言葉をはっきりと表現します。

<第2 マーチ>

全部で12小節（4小節+8小節）という構成が、マーチの形式からは外れた（外した？）課題曲マーチの一つの姿です。ポイントは、打ち込みリズム音形を、きちんと2小節のフレーズとして捉えることです。この簡単そうな打ち込みには、日本のバンドと欧米のバンドとの違いを感じます。ワルツのベース・ラインと後打ちの関係と良く似ています。どうしても、欧米バンドのように“粋”に行かんのですね。マーチと云うより（マーチの形式ではなく）、歌謡ポップスのような、**B**からの8小節が加わって、マーチが終わります。

<Trio>

マーチ～Trio～マーチという、複合3部形式が、行進曲の基本の形式です。これは、17世紀の舞曲（メヌエットがその代表）の形式に由来しているんです。だから、マーチって舞曲と同じで、人の動き・動作・基本パフォーマンスなんだよ、ってフェネル氏のお言葉の通りです。だからちゃんと、8分の6のマーチがあるのです。

Trioは、基本的には、中間部としての、穏やかな・優しい部分を持って、主部と対比した楽節を構成するわけです。本来はここで、ヨーロッパのマーチのように、主部のマーチに戻る（ダ・カーポする）わけです。主部のマーチを再現して、終わります。スーザのマーチの形式のように、Trioを大きい終わりの楽節として、ブリッジを挿入した構成をとると云うことになりますと、終結部を盛り上げる、といった難しい楽節を作り上げなくてはなりません。課題曲マーチは、全てこの形をとっています。この曲も例外ではありません。

8+8小節の主部に、2小節のブリッジがついて、もとの8+8小節が繰り返されています。スーザのマーチの形です。短いように思われますが8小節単位の部分が、オーケストレーションに変化を付け、色彩感を持って、気持ちの高揚を促しています。

<Trio 主部>

Cl.とSax.での旋律、良くある手ですね。同じリズムフレーズを繰り返す前半4小節が、些か単調と云うか、間延びしてしまいそうですので、上手く表情を付けてみましょう。後半の4小節も、えらい長い音で終わりますから、その間に入って来るフレーズの表情もしっかり考えましょう。チョコチョコッと（言い方悪いかな）入るTrp.の間の手も、残念ながら貧弱です。次の8小節に付けられたカウンター・メロディも、リズム感の乏しいガラツとしたフレーズになっちゃっています。入りの2小節後の方のフレーズ、少し気持ち、リズムを変えれば良かったのにと思います。

コード進行は、教科書通りの納得できる進行で、これも十分に勉強できる場所です。時々挿入されたdimコードをフレーズのつなぎとして、軽い表情で存在を示します。**F**からのコード進行、セカンダリー・ドミナント7thを使ったB♭→Bdim→C→C7/B♭→F7/A→B♭→E♭→Cm7→C7→F7→E♭dim→Gm/D→F7/C→B♭の進行は、とても良い（ベース・ラインを含めて）です。

ベース・ラインとHr.の刻みで、弾む気持ちをつたえて、少しオーヴァーになっても良いと思いますので、思い切った歌わせ方を考えてみましょう。自分達のバンドの何かを表現する気持ちを、大きく持つことが大切です。

例えば、Cl.とSax.どちらの音色を生かすか、こういった音色旋律に作り上げるのか、といった

表現の在り方も考える良い勉強と思えば良いのではと、思います。指揮者の感性の出どころ、でもありますね。

ああそうだ、Tamb.が入っていますね。小学生の器楽合奏のようにならないように、オトナのTamb. (?) になっていないとね。

<Gからのブリッジ>

形式・様式を踏まえて（ヨクアルと云えばそうなんですけど）しっかりした表現になっています。Sax.と Hr.のフレーズが、出だし大変いい感じで、縁取りを作ります。各フレーズに付けられた、山形アクセントは、十分に強調されなくてははいけません。

<H以降、Trio 主部の繰り返し>

様式としては、マーチの最終楽節として、きちっと作られています。カウンター・メロディが力強く鳴って、そのおかげで、間延びした主旋律を引き立たせています。これは、当初からの作戦だったのでしょうか。高音部の細かい装飾が、もう一步というところです。充分、盛り上がっていますので、この主部Iで終われば良いのに！！課題曲マーチの多くは、なぜエンディングを付けようとするのでしょうか。コンクールですから、何か劇的におわりたいのでしょうか。スーザ大先生のように、Trio 主部でバシッ！！と終わると良い（スカッとするのに）、といつも思っております。

Ⅲ 秘儀Ⅲ／西村 朗

今年度の課題曲の中では、やはり、この曲が一番気になります。

この曲を課題曲にした（委嘱した）ことについては、選考した過程・提出した側の意図・目的など、なにも説明はありませんので、やはり、参加する側・演奏する側で色々考えてみるしかないですね。

僕は、コンクールで演奏するかは別にして、一度は演奏してみる（学習する）、価値はあると思います。簡単に云って、音楽という世界（意識・演奏・音色の考察・音の不思議など）を広げる・深める、という意味があります。コンクールと並行して（他の課題曲と並行して）、時間を少し取って、演奏してみても良いのではないのでしょうか。

2008年にバンド維新で発表された「秘儀Ⅰ-管楽合奏のための-」から、同じく2014年の「秘儀Ⅱ〜7声部の管楽オーケストラと4人の打楽器奏者のための〜」、そしてこの「秘儀Ⅲ」と、「秘儀」という主題・形式・様式で作曲されてきた、シリーズの1曲です。「秘儀」とは、その通り秘密の儀式ということですが、一つの宗教的な祈りとしての儀式、と捉えればいいと思います。ある一つの宗教としての、原理・教義をもって、密教として存在する秘密の儀式、というものではなく、広く開かれた世界での祈りと、考えています。

すなわち、自分達の考える祈りを、何に向かったの祈りであるかも含めて、表現すれば良いのだと思います。

少人数編成（20〜30名）で、響きの多様・多彩さを求めたい、と思います。各パートの主張が、違った響きの色彩を放ち、それでいてコントロールされて、一つの方向を示すという、難しいアプローチになります。このことが、複雑だと捉えるより、むしろそのことを楽しいと感じられるかどうか、この辺りのことですね。

例えば、打楽器の音色の創造には、東南アジア・インド・チベット仏教といった、色んな要素を持ち込んでみることも、興味が湧くところでしょう。

さて、この曲の構成ですが、昨年発表された「秘儀Ⅱ」が、この「秘儀」の形式・流れについて、大変解り易いと思います。

今回の「秘儀Ⅲ」は、その中の舞曲の姿を捉えたものと考えられます。舞踏のリズムに乗って、祈りが歌われる、という構造です。

巡回すると云いますから、早い3拍子（リズム・パターンに乗った）の一種の“一人ロンド”でしょう。それが集団になって、祈りの輪が（香りが）立ち上がってくると云うわけです。

導入部を作る冒頭からのリズム・フレーズは、パターンを変えながら（小節数を不均等に分割して）、フレーズを創っていきます。Tamb.をヘッドに乗せた Timp.、シズル付きの S.Cymb.、2列に鈴のついた Tamb.がフレーズの終わり（アクセントをもって）を示します。全てマレットは、小さくて、硬いものが良いのではないでしょか。

祈りの主要旋律は、**A**から Fl.1st.と Cl.1st.での1本の線で示されます。このユニゾンの旋律線からずれ（音程・律動ともに）を伴っています。そして、このずれ（短2度不協和音のライン）が、増殖して進行して行きます。これをヘテロフォニーと呼んでいます。解り易い例としては、

雅楽の「越天楽」に聴くことができます。

この鋭角の響きの中に、透明な恍惚を捉えるわけです。東南アジア・インド・チベット仏教とかいった、色んな祈りの要素の香りが漂ってくるのでしょうか。これは、西欧の音楽で育て上げられた音楽人には、どのように映るのでしょうか。僕みたいに、外野で暮らしてきた人間からは、その辺りとても興味のあるところです。誤解を恐れず、少々乱暴に書きますと、西洋式の和声・対位法が無力的に見えてきます。

解決を持たずに強く進行して行くこの音楽や、ときに見ることの出来るユニゾン音は、十分に感じとれますが長い楽節が続きます。**F** (**G**の前) で、最初の楽節は終わります (解決と呼べないことありませんが)。

G4 小節目から、旋律はパート・セクションを変えて繰り返されて、1 種のカノン状態を作り出して行きます。ここではヘテロフォニー旋律が、大きく主旋律から遊離して行くといった様相を作り出します。大きなクライマックスを持って、最終的には全てがトランス状態となって (**J**) 解決します (**K**)。

K~**L**。旋回する軸足の踏み込み、鋭いアクセントを2拍目に持ち、長い *accel.* は、*poco a poco* としながらも、魂の凝縮していく猛烈さを感じます。

Mからの第2場は、昇華されようとする、集団の厳かな祈りの場です。ダイナミクス・速度ともに、変化を伴って進行します。バンドが集団としての混然とした一体感をもって、全てに対応しなければなりません。

第3場、**S**より最後のクライマックスに向かって、高潮した祈りが続きます。**V**の Timp. の3連符が儀式の終末を演出します。合奏の姿は、僕でしたら、比叡山根本中堂での大晦日を思い出します。金剛峰寺での大声明でしょうか。

2拍目に設定されているアクセントは、パート・セクションを一定せずに、現れて来ます。そして、律動の強拍であるとともに、フレーズの切れ目でもあります。

最後に、**D**と**G**の大ユニゾンで終了する、このスリリングにも感じ取れる、爽快感は何なのでしょう。音楽の命の存在は、複雑な音様で表出するものではないことを、教えられています。

以前にも書きましたように、西村 朗先生の音楽については、東京シンフォニエッタとの「虹の体」「天女散花」の2枚のCDが、その音色表現の多彩さ、響きの広がり・繊細、など多様に伝えてくれています。

IV マーチ「プロヴァンスの風」／田坂 直樹

プロヴァンスは、フランス南西のアルルから、南東の地中海に面した、コートダジュール・ニースまで、を指しているのでしょうか。ローマの遺跡と素朴な自然・真っ青な空、対照的に、陽光の注ぐ地中海に面した、紺碧の海岸、どちらもロマンを存分に与えてくれる、本当にエエとこです。その空と海を渡る風がテーマだ！！と云うマーチです。

ウーム、そうかなあ。確かに、曲全体のスケールは、(空と海)を画いたスケールの大きさは感じます。しかし、僕はこの曲のとくに第1マーチには、スペインのパソ・ドブレのような雰囲気を感じているんです。ただ、パソ・ドブレは、8分の6(2拍子感覚の)ですから、パソ・ドブレではないようです。

スペインから西へ旅をすれば、南仏プロヴァンスへ入りますから、この作曲者は、スペインの風に乗って、プロヴァンスの風になって、という絵を画いたのでしょう。このようなイメージを持って、曲を作ってみて下さい。

<導入部>

それぞれのセクションを生かした、スコアリングがとても良い。颯爽とした風を孕み、光が注いで来る。S.D.のリムショットとTimp.は、すごく格好よく。

<第1マーチ>

まずはテンポ設定。132よりは遅くならないで下さい。何せ、**Appassionato**です。この情熱的というイタリア語的には、「心かき乱されるほど夢中なんだ」ですから、颯爽と前進あるのみ！！ベース・ラインとホルンの叩き出すリズムの弾み方は決定的。これに、16分音符の装飾旋律の流れが、あくまで格好良くからまって行きます。

また **B**は、コード分散旋律(カウンター・ラインも含め)が主になっていますから、コード進行感覚がしっかりしていないと、流れ・抑揚ともに果たせないと思います。とくに、第2マーチの後半に繰り返されますから、全く同じ感覚で行くか、変えて行くか、指揮者の感性の見せ所です。

<第2マーチ>

常習の形をとります。中低音の主旋律には鋭い切れ込み、高音の打ち込みにはリズム・フレーズ感が要求されます。この第2マーチに、いつも日本のバンドと欧米のバンドとのはっきりした違いを見ます。皆さんどうでしょうか？

日本のバンドは、旋律のアタマの付点8分と16分とが、何か間延びしているように感じます。打ち込みの方も、2つの16分と続く2つの8分のフレーズが、もう一つ言葉悪いですが、ダサイのです。あのワルツのベースと後打ちの姿に似ているなあ、と思います。という僕にも。欧米の学生くん達のように、サラッとやっちゃう、あの感覚は羨ましいなあ、と思うだけです。

この粋なフレーズ感覚、どうしたらエエねんやろ。

最後**E**からは、**B**を繰り返して、終わるわけですが、ここは全く**B**を繰り返せば良いと思いますが。先に書きましたように、指揮者の胸三寸です。

<Trio>

下屬調へ転調しないで、それも遠ーい！！変イ長調に転調するのです。しかも予告無しの突如の転調です。セオリー通りの、下屬調への転調であれば、マーチの終わりの和音（マーチの主和音）が、下屬調へのドミナントを形成するわけですから、すぐに転調して、Trio へ入っても、これは突如の転調にはなりません。

この曲のように、減5度の転調では、突如！！となりますね。予告無しですから、感覚が付いて行くかどうかの話になります。とくに、入りの[F]のフレーズ（まだマーチの調を引きずっています）がありますから、よけいに突如感を増幅しています。それが、ネライなんでしょうか。このスコアリングからは、とくに仕掛けは見出せません。転調の仕組み・手法（メカニズム）は、一杯あるのですが。

短調からの転調としては、同主調・長調への転調が、最も自然だと思っています。ですから、マーチの終わりで、D Major に転調完了していますから、D Major で Trio へ、と自然に、行きたいところです。

この Trio の主題・展開なかなか良いんです。作曲者としては、どうしても使いたい心が一杯だったのでしょうか。つまり、マーチとこの Trio、2 つの曲が出来て、それを繋ぎ合わせて、構成しようと考えられたのではないかなあと推測します。

それにしても、D Major から A \flat Major へだ。どうしよう？いやあ、減5度って、別に？

[F]の予告フレーズ（にはなっていないんだけど）とA音のパパパーンで、半音下がって（半音転調のつもりで）ということになったのかなあ。

僕やったら、D から C \rightarrow A \flat \rightarrow E \flat 7位の予告はしておくかな。まあ、この転調は、感覚的に受け入れることが出来るかどうか、と云うことです。

もう一度書きますが、この Trio の旋律は、なんとも良いです。入りの動機が良いんです。さらっとした、心地よい風のイメージは確かにあります。[G]から8(4+4)+12(4+4+4)の2部歌謡形式で、[H]でもう一度繰り返される、長い（スケールの大きいと云うべきか）Trio 主部です。オスチナート風の和声リズム・フレーズに乗って、いろんなスコアリングで書かれています。この多彩さを生かすことが出来るかどうか課題です。

もう少し、音楽の中味にふれてみます。課題曲として良いなあ、と思ったのは、コード進行が、まさに教科書通りの、折り目正しいもので、十分に教材になります。

8小節の[G]前半は主3和音で、後半は副3和音のフレーズに移ってと、良くあるとかがありきたりと云ってはいけません。きちっとしている、と云って下さい。8、19小節目の1拍目のsus4のコードは、意識して粹に演奏します。11小節目からのII7 \rightarrow V7 \rightarrow III \rightarrow VIの、ダブルドミナント、セカンダリドミナントの進行も、しっかりと捉えておきましょう。

[G]からの和声リズムのパターンは、間延びしないように、マーチとしてのリズムを保たないといけません。1拍目のスタッカートは軽く、2拍目の2分音符には、軽くアクセント付けて、すぐにディミヌエンド、4拍目はアウフタクトの意味を持って、といった意識的なリズム（ノリ）を作り出して行くことが重要です。

旋律ラインは、マーチの意識を持ちながらも、自然な情感を歌います。長く続くユニゾンの流れが、平凡にならないように、部分的な音色旋律を作り出して行くと、すごく立体的な演奏になります。即興的に入ってくる Picc.は、あくまで目立って、アドリブっぽく、むしろ様式ばらずに、

自由放漫なところで行こうか。

Ⅱからの Sax.セクション+Hr.のカウンター・メロディ、これはキッチリ行きたい。さて、Sax.セクションで行くか、Hr.で行くか？僕は、ここも音色旋律として、作ってみたい。このカウンターのメロディは、自由なフォームで書かれていますが、様式的には、多くのものを含んでいるのが特徴です。分散和音・スケールで異なったリズム音形など。このⅡの前半が終わり、すうーとアタマに戻り、一瞬穏やかさを取り戻す、この4小節を置くセンスは、良い流れです。そして、これに続く13から16小節にかけての長い *cresc.* の部分は、一つのシーンとしてしっかり生かします。

半音下降のベース・ラインが格好良く、またもや Sax.セクションと Hr.のカウンター・ラインが絡んで来ますね。このカウンターのラインは、スケールとして（順次下降進行）の力強さを強調します。

<Ⅲからのブリッジ>

Trioの主部としては、長いⅢ、Ⅳが終わった所で、ファンファーレだ！！闘牛場の感じを持って、ここでスペインを思い出させて、という感じです。TrioのブリッジとしてのファンファーレⅢは、E♭→(A♭dim)→G→A♭→B♭→C♭→D♭と、きわめて感覚的に（理論的にどうのこうのとはなくて）進んでいきます。

<クライマックス>

Ⅳからここはもうマーチとして、クライマックスを迎えます。Trio主部の後半を2小節縮小して、エンディングを付けるという周到さを見せて終わります。こうされると、僕のエンディング不要論は、少々マイッタ、になりますか。

最後に来ると、あの入り口の転調感覚の受け止め方は、何だったのか。忘れてしまいそうな、感覚になってしまう不思議さを持つ Trio です。

2015 年度 全日本吹奏楽コンクール課題曲分析

課題曲の中の課題 2015

監修・著作：櫛田 肤之扶

編集・制作：株式会社ウィンズスコア

配布・公開日：2015 年 5 月 1 日

※本書の著作権所有者は、著作者である 櫛田 肤之扶 であり、櫛田 肤之扶 の協力・許諾のもと、
(株) ウィンズスコアが本書を制作・公開しております。

※本書の配布・コピー等の利用については、本書の内容・目的を理解した上で、金銭の受け渡し
が発生しない場合に限り許可いたします。

※本書を使用するの、第三者との紛争・トラブルが発生した場合、著作者・制作者、及び
(社) 全日本吹奏楽連盟は一切責任を負いません。